

人工言語学研究会著 2011年8月20日初版

# 人工言語の ランドマーク

人工言語の歴史に名を刻んだ者たち

## ●人工言語のランドマーク

ここでは人工言語史を動かしてきた出来事と、人工言語史に名を刻んできた者たちについて通時的に列挙する。これらの偉人が行った偉業が人工言語史を動かし、形成してきた。

このリストでは人工言語の歴史を揺り動かしたランドマークだけに言及するため、雑多な出来事や二番煎じの作品については掲載するに足らないと判断した。

西暦	出来事
12世紀	ビンゲンのヒルデガルト、Lingua Ignota (『未知なる言語』)
13世紀	ライモンドゥス＝ルルス、Ars Magna (『偉大なる術』)
1638	フランシス＝ゴドウィン、The Man in the Moone (『月世界の人』)
1647	フランシス＝ロドウィック、A Common Writing (『共通の文字』)
1661	ジョージ＝ダルガーノ、Ars signorum (『記号術』)
1668	ジョン＝ウィルキンズ、An Essay towards a Real Character, and a Philosophical Language (『真性の文字と哲学的言語に向けての試論』)
1677	ドニ＝ド＝ヴェラス、『セヴァランブ族物語』
1678	ライプニッツ、Lingua Generalis (『一般言語』)
1710	ティソ＝ド＝パト、『ジャック・マセの冒険旅行』
1797	ド＝メミュク(Joseph de Maimieux)、pasigraphie (パシグラフィー) で一躍時代の寵児に
1827	フランソワ＝スードル、ソルレソル (ソレソ)。1855年のパリ万博で1万フランの賞金を獲得
1855	ソトス＝オチャンド、『普遍言語の計画案』
1866	パリ言語学会、言語の起源と普遍言語にかかわる論文を受理しない方針を明らかに
1879	シュライヤー、ヴォラピュク。有名になった初の国際補助語
1887	ザメンホフ、エスペラント。世界最大の人工言語
1890	「ヘブライ語委員会」が設立され、ベン・イエフダーが代表に就任
1901	クチュラとレオー、「国際的補助言語を採択するための委員会」を発足
1907	クチュラとレオー、『新しい国際語』
1907	Unio por la Linguo Internaciona Ido、Ido (イド)

1919	イギリスの委任統治当局、ヘブライ語をパレスチナにおける公用語の一つと宣言 現代ヘブライ語を人工言語とみなすなら、世界で最も成功した人工言語と定義できる
1930	オグデン、Basic English (ベーシック・イングリッシュ)
1951	International Auxiliary Language Association、Interlingua (インターリングア)
1954	トールキン、『指輪物語』。芸術言語が徐々に花開いていく
1955	ジェームズ=クック=ブラウン、Loglan (ログラン)。サピア=ウォーフの仮説の調査のために設計されたという点で斬新であった
1975	ジェームズ=ノウルソン(James Knowlson)、Universal Language Schemes in England and France 1600-1800 を出版
1984	マリナ=ヤグエロ(Marina Yaguello)、Les Fous du langage, des langues imaginaires et leurs inventeurs を出版
1991	セレン=アルバザード他、arka (アルカ)。2011年に、アプリオリ自然主義世界を持ったアプリオリ自然主義人工言語の中で世界一深く作り込まれた人工言語として同言語を完成させる
1995	Microsoft、Windows 95 を発売。人工言語の作業が紙から PC ヘンフト開始
1995	ウンベルト=エーコ(Umberto Eco)、The Search for the Perfect Language を出版
00年代	インターネット・ブロードバンドの普及。人工言語の公開が容易に
2004	ネリエール、globish (グロービッシュ)。一応国際補助語に分類しておく
2005	セレン=アルバザード、ウェブサイト「新生人工言語論」を立ち上げ。人工言語の作り方や人工言語そのものの解説を国内で初めて行い、啓蒙する
2009	アリカ=オクレント、In the Land of Invented Languages を出版
2010	マーク=ローゼンフェルダー、The Language Construction Kit を出版。言語学の初歩から説明しつつ人工言語の作り方を指南。ただし言語の背景となる文化や風土の作り込みについてはあまり言及がなく、自身が作った言語も地球と異なる舞台なのに地球の言語を基にしたアポステリオリ言語であるという矛盾を抱え、造詣が甘い
2011	セレン=アルバザード、人工言語学研究会を発足。人工言語学という新しい学問が生まれる
2011	セレン=アルバザード、『紫苑の書』を出版。異世界で言語をゼロから学んでいくというリアリティを追求した世界初のファンタジー小説で、芸術言語の歴史上大きなランドマークとなった
2011	セレン=アルバザード、『人工言語学・アルカ』(本書)を出版。人工言語学が提唱され、アルカが出版された人工言語になり、全文アルカの小説『夢織』が収録され出版された。ここまで本格的にゼロから作り込まれた人工言語が登場し、出版されたのは世界初の快挙である